
別れ

桜井 広海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

別れ

【Zマーク】

Z5604F

【作者名】

桜井 広海

【あらすじ】

最近冷たい彼、電話に出ないし会う回数も減つて来ている。もうダメなのだろう。彼は別れを切り出さないが突然彼から電話が…。

(前書き)

毎回似た様な作品で下さいません。

ツウルルル…携帯のコールを10回鳴らしても優介は出ない。

10時23分。仕事ならもうとっくに終わっている時間だ。

涼子が彼の異変に気がついたのは、ここ最近の事。平日の夜はだいたい携帯に出ないし、土日もどちらか決まって用事があるといって会えない。

2人で会っている時も何処か上の空で話しかけても聞いていない事がある。疲れた表情をし、何処か冴えない。

しかも、友達の明美が、女と歩いている優介を見たと電話をくれたのは昨日の事。

涼子は、もうダメかもしないと心の何処かで思っていたが、わざと半目を閉じた状態でいたのは、もしかしたら私の勘違いだと思いたかつたからだった。

次に電話した時は明るい声で電話に出て、”愛してる”と言つてくれるかもしないと心の何処かで期待していた。

しかし、電話を掛けても優介は出ない。

そんな毎日が続いても涼子が決して諦めなかつたのは、2人の甘い時間が、これまでの5年間が嘘ではなかつたと必死に自分に言い聞かせていたからだ。

恋は、いつか終わる。

涼子には痛い程判つていたのに、自分から終わらす事が出来ないでいた。

そんな時、珍しく優介の方から連絡が来た。

「涼子、話があるんだ。」

その言葉に涼子は「クリと睡を飲み込んだ。

ついに来てしまった。別れを告げられる口が…

「……話つて？」

震えた声で優介に問いかける。別れ話を聞くためにノコノコ出て行くのは惨めだ。

聞きたくないが、この際仕方ない。遅かれ早かれ、この言葉を聞くのなら、今言つて欲しい。

「.....」

沈黙の少し後、最初に口を開いたのは優介だった。

「どうしても会つて話したいんだ。けじめだから。」

けじめ… そうか… 本当に別れ話するんだ… 涼子は心の何処かもしかしたら全く違う話を持ち出すのではないかと思つていた。

優介の飼つているラブラドールが病気だと仕事のトラブルが、とか… そんな話を何事もなかつた様に言つてくれる様な気がしたが、微かな期待はすぐに打ち砕かれた。

「…わかった。何処へ行けばいい?」

何も知らないと言つ様な声で優しく言つた。ここで声を荒げて問い合わせるのは簡単な事かもしない。

明美が見た女は誰なのか? 仕事、仕事つて言つてるけれど本当は何をしているのか? 聞けばいい。本当に簡単な事かもしない。

けれど涼子がそれをしなかつたのは、いや、出来なかつたのは、これ以上惨めになるのが怖かつたからだ。

「い、いつもの…涼子の家の近くのカフフでどう?」

緊張しているのか何なのか知らないけれど優介の声は震えていた。

「じゃあ、あとで…」

それだけ言って電話を切つた。

待ち合わせの時間は3時だったが涼子は少し遅れて行つた。涼子が先に行つて優介を待つている光景を思い浮かべると、そんな状況は悲し過ぎる。

「待ち合せで…」

優介を探した。

目が合つて優介は立ち上がつた。

「『』めんね。送れちゃつて。」

ドアを開けると、にこやかに笑いかけ、“何名様ですか?”と言ふウエイトレスが涼子には馬鹿にされている様に感じる。無表情のまま言う。

涼子が何も知らないふりをして言つと優介は照れた様なバツが悪そ
うな顔をして頭をかいた。

「俺も今来た所だから…。」

ふと灰皿を見る。3本吸つたのが判る。“今来た所だから…”な
んて判りやすい嘘。優介の行動は変わってない。ただ一つ、思いつ
めた様な顔を除いては…

初めてデートした時もそうだった。服装選びに時間がかかってし
まい、尚且つ電車が人身事故で止まってしまつて30分も遅刻した
のだ。

それでも優介は文句一つ言わず、“僕も今来た所だから”と言つ
たのだ。

その時も灰皿には沢山の吸殻が入つていた。

そんな事を思い出していると、優介は水を飲み干して、“座んな
いの？”と言つた。

涼子は“ああそうか”と思つ出したよつた席に座つた。

「……

少しの沈黙の後、優介はコーヒーを飲もうとして、指を滑らせコー
ピーカップをひっくり返していた。

「あつつ……ごめん。」

テーブルのおしごりで慌ててコーヒーを拭く。

動搖している証拠だ。

もういいよ…涼子は言つかどうか迷っていた。一度冷めてしまつた愛は食べ物の様に簡単に温める事なんか出来ないもんね…頭の中でそんな風に思いながら、必死にコーヒーの零れたテーブルを拭く優介を見ていた。

「「めん。」めん。呼び出して置いて初っ端からコーヒー零すなんて…」

そう言って、涼子をチラリと見た。

涼子は冷静を装い微笑む。

「…話が合つて…どうしても直接会つて言いたかったんだ。きちんとしたかつたし…涼子何か頼む?俺、コーヒー零しちゃつたし、何か飲み物頼みたいし…」

慌ててメニューを涼子に差し出す。

涼子は何か飲みたいとは思つていなかつたが、流石に水だけと言つのも寂しいので紅茶を注文した。

「ミルクとレモンどちらがよろしいですか?」

またもや笑顔のウエイトレスに涼子は”ストレートでいいです”と意地悪な口調になってしまったかもしれない。と思つたが人の

気持ちを考える余裕はない。

優介はまるで涼子に喋る隙を「えない様に次から次へと言葉を発した。

「あつお腹すいてない？ サンドイッチあるよ。スパゲティーもカレーなんかもある。あつそれともデザート？ チョコレートパフェなんか？」

涼子は何故だか悲しくなり、優介の言葉を止めた。

「話つて何？ 早く…聞きたい」

本当は全く聞きたくないが、いざれ聞く別れ話であれば早く終わらせたい。

「ああ…そうだね…そうだよね…話はね…実は、俺と涼子の事。」

優介は身を乗り出し何かを言おうとした瞬間、ウエイトレスの邪魔が入った。

「おまたせいたしました。コーヒーの方」

優介は小さく手を上げた。涼子の目の前にも紅茶が置かれた。

2人は無言のまま。

優介は目の前に置かれた飲み物に砂糖とミルクを入れた。

スプーンでかき回した後、一口飲み、話を始めた。

「ずっと、わからんとしたきやつなつて思つてた。俺達も…」

言いかけた最中、涼子は勢い良く立ち上がった。

やつぱり聞きたくなかった。優介の口から、”終わりにしよう”なんて言われるくらいなら私からひきよならしよ。そう思つた。

「…………」

何か言おうとしたのだが、口を開いたつきり、喉の奥からビリビリ音が出てこない。言葉よりも先に涙の方が迫り上げて来た。優介に涙を見られたくない。そう思い、顔を背け、バックをとり、思わず店の外に飛び出した。

「涼子？ちょっと待つて。」

優介の声が聞こえたが、涼子は止まると来なく走った。

もう終わり。やつぱり無理だよ…。別れを決告げれば必ず誰かが傷付いてる。笑顔で別れたいなんて、奇麗事だ。そう思つた。

涙で外の景色がぼやけていて良く見えない。それでも止まる事が出来なかつた。

「涼子！待つて。」

後から聞こえて来る声を振り払つ様に走り続けた。

必死に追いかける優介。逃げる涼子…その時、突然聞こえてきた
”危ない！！”と言つ叫び声。

光とともにトラックが見えた。

2人は大きな光に吸い込まれて行く様に立ち止まつたまま動けなか
つた。

その後聞こえたのは回りの雜音と老人の叫び声だった。

「人が撥ねられたぞーーー！救急車を呼べ。」

青い小さな箱が道路に転がつた。

地面上に落ちているその箱は優介が涼子の為に買ったものだ。

「…優介…」

涼子は目の前にある指輪のケースを手に何が起きたのか判らなかつた。

「涼子…君に結婚を申し込もうとして…仕事以外に夜、働いてたんだよ…ほら…ティアラメラの指輪欲しいって言つてたろ…だから…」

涼子は自分が大きな勘違いをしていた事に気が付いた。

「だつて…」

混乱していく、この状況も理解出来ず上手く喋れない。

流れ出す血液は今までに見た事もない量で寒気がした。

「優介…ごめんね…アタシがバカだったんだね…こんな事になっちゃって…本当にごめんね…」

優介は何も言わずに涙を浮かべている。唇を噛み締め震えていた。

「怖かったの…不安で…もつ變されてないと思つたから…他の女と

いの明美が見たつて言つし……別れ話されるんだと思つたから……

優介を見つめる。田をそらしたら何もかも終わってしまうような気がした。

「姉貴だよ……涼子にプレゼントする指輪選んでもらったんだ。」

「もう……こよ……」

涼子は言った。

「じめんな……心配かけて……」

優介は蚊の鳴く様な声で言った。

「好きよ。ずっと……」

涼子の声に優介は優しく微笑みかけ、小さく頷いた。

「あのね……優介……」

涼子が言いかけた。

「もう……いいから……もう喋るなよ。おい？涼子？おい。しつかりしろ。救急車もうすぐ来るから頑張れ！頼む目を閉じるな。」

叫ぶ優介の声が聞こえたが重く下がって来る瞼を持ち上げる力がもうない。

優介……アタシの早とちりだった。バカだねアタシ……全て壊れちゃつたね。

声に出せない。悔しくて涙が流れた。

「涼子！…涼子！…！」

優介の声は聞こえたが反応出来ない。

「…………」

口を微かに動かして力尽きた。

抱きかかえられて揺さぶり続ける優介に涼子は心の中でつぶやいた。

”こんな結末になるんだつたら、きちんと自分から優介に聞けばよかつたのかな……死ぬんだつたら……もつと素直に気持ちぶつけるべきだった。”

「…………」

抱きかかえた涼子の体を地面に置き、優介も心の中でつぶやいた。

” 結末はどうあれ涼子と別れる事が出来た。これから美奈子にプロポーズしようと思つてたけど…今日は無理そうだな…。危ない。美奈子のこと知られてたとは…でもまあいいか。俺、演技派だなあ…咄嗟に思いつくなんて…でも涼子を傷つけない最後の優しさだよ。

”

優介はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

(後書き)

どん返しの裏返し、彼女の悪い勘は当たっていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5604f/>

別れ

2010年10月22日11時52分発行